様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：17101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22700601
研究課題名（和文）英国の大学剣道における指導上の問題点とその改善に関する方法論的・文化論的研究
研究課題名（英文）Methodological and cultural studies on the issues and suggestions for the improvements in teaching kendo at British universities
研究代表者
本多　壮太郎（HONDA SOTARO）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10452707

研究成果の概要（和文）：本研究では，英国の大学剣道クラブ指導者を対象とし，指導者の修練観や指導観，指導上の問題点などを質問紙及びインタビュー手法によって明らかにした。指導者の考えは,「修練観」「使命感」「指導観」「ギャップ感」といったカテゴリーに分けられ，各カテゴリーに関する内容が構築されるに至った過程も解釈された。これにより今後，英国大学剣道の更なる普及と発展に貢献する指導・修練の方法論を構築するための価値ある研究資料が蓄積された。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to interpret British university club teachers' views of training and teaching of kendo, and the problems that they have in teaching in their clubs by employing the methods of questionnaires and interviews. Their thoughts were divided into four categories; 1) their views on training, 2) their sense of responsibility to their clubs, 3) their thoughts on teaching, and 4) their sense of gaps between themselves and their students. The factors that they had constructed their thoughts on each category were also interpreted. These findings will make a great contribution to developing methodologies of training and teaching of kendo for further development of British university kendo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：運動方法学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学
キーワード：剣道，英国剣道，指導法，修練法，国際的普及

１．研究開始当初の背景

(1) 剣道の国際的普及に関する研究については近年，一つの国や一部の地域を対象とした現地の活動状況報告や，活動上の問題点の分析及び改善策について検討するものが幾つか見られるようになってきている。

剣道の国際的普及を図る上では，それぞれの現地での取り組みや事情などについて理解した上で，指導や支援に携わるべきであり，同類の研究がさらに積み重ねられていくことが求められている。

(2) これまで取り組んできた英国の大学剣道に普及・活動状況に関する研究では，部員の立場から剣道への継続要因，修練状況，修練上の問題点などを明らかにしてきた。今後は，大学指導者の立場からの指導観や修練観を明らかにし，双方を比較・検討することにより大学剣道の更なる発展の可能性を見出すことができる。

(3) 外国人修練者を対象とした資料については，日本の文献の翻訳や外国人修練者により執筆された入門書がいくつか出版されている。しかしながら，それらは技術，技，試合審判規則や日本的武道論の紹介にとどまっており，日本とは異なる環境や文化的背景のもと，指導現場で活かすための方法論や方法に関するものはこれまで手がつけられていない。

２．研究の目的

(1) これまでの英国大学剣道における研究をさらに発展させ，大学クラブ指導者の指導観・修練観と実際の指導上のギャップ，また，指導上の問題点について明らかにする。

(2) 上記の結果を，先行研究による大学生修練者が抱える修練上の問題点と比較する。その際，問題点の共通点・相違点及びそれらの要因について剣道修練の方法論及び文化論的視点より分析し，双方の問題点を解決する剣道指導の方法論の構築を試みる。

３．研究の方法

(1) 研究の対象

先行研究において調査対象とした 10 の英国大学剣道クラブの内，現在も活動が続けられており，定期的に指導に携わる指導者を持つクラブの指導者を対象とすることとした。このような指導者がいる大学クラブは，エジンバラ大学，ノーサンブリア大学，ダラム大学，ロンドン大学，インペリアル大学，ケンブリッジ大学，オックスフォード大学，グロースターシャー大学剣道クラブの計 8 クラブであり，2 つのクラブにおいては，同じ指導者が指導に携わっていることにより，本研究において調査対象となる指導者は計 7 名であった。

(2) 調査の時期

2008 年 8 月から 2011 年 9 月にかけて 6 回に亘って渡英し，上記のクラブを訪問し調査を実施した。また，対象者のうち，3 名は上記の期間中，日本を訪問しており，その際はこれらの指導者を訪問し追加の調査を実施した。

(3) 調査方法

① 質問紙調査

対象者の特性，稽古状況，指導状況，稽古観，指導観，指導･稽古上の問題点などに関する基礎的な情報を把握し，後述するインタビュー調査の資料とするため，書き込み式による独自の質問紙を作成した。質問紙は，英国人剣道有段者（当時三段）のチェックと修正を受け完成させ，インタビュー調査に先立ち，それぞれの対象者に研究趣旨の説明及び研究への協力への同意書とともに E-mail で送付した。

② 半構造的インタビュー調査

質問紙により得られた情報，結果を基に，

上記に述べたような対象者の剣道観を深層的に理解するため半構造的インタビューを実施した。

質問形式が標準化されない半構造的インタビューでは，対象者との会話の流れが重視される。対象者の考え方について深層的な理解を得るために適した方法であり，実際のインタビューにおいても，質問項目をリス化しながらもそれに囚われることなく，対象者には自分たちの考えを柔軟に語ってもらった。

(4) 分析方法

会話によるデータを分析する際は，対象者の考えを適切に描き出しながら次々と発現するカテゴリーを処理するシステムが創出される必要がある。本研究において得られたたデータは，「トランスクリプション」「タグ化」「プロパティ化」「カテゴリー化」による段階的分析法により処理された。

全てのインタビューデータは Word ドキュメント上にテクストとして記述化され，対象者それぞれの名前を付け保存された。全ての記述を統合すると 1 ページ 40 行×40 文字のレイアウトで全 300 ページ，214,340 単語となった。

記述化された全テクストは，1 つの考えやエピソード，情報等を含む「ユニット」毎に分類された。各ユニットには，その内容に関する名称を付けるタグ化が行われ，同じ名称のタグは同一グループ化された。この作業により，全テクストは 898 のユニットに分類され，74 のタグにまとめられた。

創出されたタグはリスト化され，比較を重ねることにより情報は再分類化され，内容が同種のタグは再グループ化され「プロパティ」として個別にまとめられた。この作業により，74 のタグは 10 のプロパティにまとめられた。

この過程では，創出されたプロパティをさらに広い範疇にグループ化する作業が行われた。プロパティ化よりもより高度で，抽象的なレベルでの分析作業が行われ，筆者の中でもはやこれ以上新しいカテゴリーは創出されないという判断に至るまで作業は続けられた。結果，10 のプロパティは「修練観」「使命感」「指導観」「ギャップ感」といった 4 つのカテゴリーに分類された。

(5) 倫理上の配慮

インタビューにあたっては，対象者には事前に研究趣旨の説明書が配布され，研究への理解及び協力についての同意書を提出してもらった。元々，質問者であった筆者と対象者全員には，英国と日本での剣道を通しての親交があり，対象者の深層的で現実的な情報を引き出すのに十分な親和的関係（rapport）は築かれていた。データ分析結果の公表にあたっては，対象者のプライバシーの保護など倫理上の配慮により，対象者や対象者が語った人物を傷つけるような情報は一切公表しないこと，インタビューを通して発見された真実のみを執筆することが各インタビュー前に約束された。尚，対象者の年齢，性別，段位などは，どの対象者が誰であるのかが特定されないよう非公開とすることが約束され，剣道歴，指導歴などの情報については，対象者全員により公表しても差し支えないという許可が得られた。

４．研究成果

(1) 修練観について

7 名の英国大学剣道クラブ指導者へのインタビューから抽出されたユニット数は 898 であり，それらのうち 8.75%（77 ユニ

ット）が指導者の修練観と関係していた。このカテゴリーは「修練のあり方について」「修練の現実について」といった 2 つのプロパティから構成された。

対象者の修練のあり方についての考え方では，稽古における基本への取り組みへの強い思いが示され，また，剣道を通して目指すものについては，自分の生活の充実に繋げていくことといった考えが対象者独自の修練の捉え方により示された。

対象者の修練の現実についての考え方では，稽古や修練についての理想や目標とは異なる現実の修練状況，また，稽古上の不満について語られた。指導者という立場上，自身の稽古やクラブ運営などに関する現実が理想や目標とは異なりながらも，それを肯定的に捉え，自身の修練への意欲に結びつける考え方とともに，自身の稽古の機会が十分に得られないことに対する不満もまた示された。

(2) 使命感について

「使命感」のカテゴリーは，「入部希望者について」「新入部員について」「クラブ運営について」といったプロパティから構成された。これらのプロパティは，総ユニット数の 29.84%を占める 268 のユニットで構成された。

指導者たちが果たさなければならないと考える使命感は，クラブの存続と発展に関するものであった。ある程度の部員がいなければクラブとしての活動も盛り上がっていかず，クラブ成立のための部員の下限数が決められているところもある。自分たちが続けてきている剣道をより多くの人たちにも始めてほしい，伝えたいという強い思いもある。しかし，毎年多数の入部希望者がいるにもかかわらず，数名程度の継続者しか出てこないという経験を経て何人かの指導者たちは入部希望者と新入部員を区別する考え方に至っていた。

指導者たち全てに共通したのは，入部希望者，新入部員には剣道開始もしくは継続を期待しながらも，既所属部員たちの稽古の機会や場が何回も失われるほどまでには時間や場所を費やすべきではないという考え方であった。定期的に且つ真剣に稽古に取り組む既所属部員たちはクラブの存続の面からも，また，「クラブを大きくすることより，よりよくしていくことである」と語った指導者もいたように，発展の面からも重要なメンバーたちである。入部希望者や新入部員に「振り落とし」や「無料体験コース」「有料ビギナーズコース」を行う背景には，開始あるいは継続への期待とともに，既所属部員を大切にしなければという使命感があった。

(3) 指導観について

「指導観」のカテゴリーは，「継続への導きについて」「指導への取り組みについて」「稽古への取り組ませ方について」といったプロパティから構成された。これらのプロパティは，総ユニット数の 38.98%を占める 350 のユニットで構成された。

「指導観」は，指導や稽古にあたり，部員にどのような取り組みをさせ，何を学ばせたいかに関する考えにより構成された。基本習得を重視する指導のあり方は，剣道を長く続けるために不可欠なものであるという考えを背景にするものであった。また，継続的に稽古に取り組ませることを通して，自分の目指す剣道に向かって真剣に取り組んでいくことに楽しみを感じるようさせたい，剣道の修養的価値に気づかせたい，といった考えも示された。これらについては

指導者たちの修練観と深く結びついていると解釈された。

(4) ギャップ感について

「ギャップ感」のカテゴリーは，「剣道の捉え方について」「稽古での学び方」といった2つのプロパティから構成された。これらのプロパティは，総ユニット数の22.61%を占め203ユニットで構成された。

「剣道の捉え方」では，入部希望者，初心者，経験者の剣道の重みや剣道のあり方についての認識が，自分たちのそれとは異なると捉える対象者の考えが示された。

「稽古での学び方」では，初心者の稽古における学びの姿勢や，初心者が感じる運動感覚，経験者が求める稽古の楽しみ方に関して対象者が感じる意識のずれが明らかになった。特に，運動感覚に関するギャップについては，対象者が感じる指導上の困難点や課題ともなっていた。今後，初心者への技術習得の手掛かりとなる動きを解明し，それを活用した指導法並びにその体系化の構築を図ることが課題とされる。

上記のようなギャップ感については，対象者が剣道を継続してきた中で構築されてきた修練観や指導観を基準とする観点から学生部員を捉えることにより生じている場合が多く窺えた。但し，意識のずれを感じながらも，部員の考えや行動に対して否定的であったり，不満に感じていたりする場合は少なく，多くの場合は部員が剣道を継続する中で今現在自分たちが感じているようになっていくであろうとの認識を示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 本多壮太郎，外国人剣道指導者の剣道観に関する研究－英国大学クラブ指導者が感じる部員とのギャップについての分析を通して－，福岡教育大学附属体育研究センター紀要，第36巻，1-12，2012，査読なし

② 本多壮太郎，外国人剣道指導者の使命感・指導観に関する研究－英国大学クラブ指導者を対象に－，福岡教育大学紀要，第61巻，第5分冊，93-103，査読なし

③ 本多壮太郎，英国大学剣道クラブ指導者の修練観に関する研究，福岡教育大学附属体育研究センター紀要，第35巻，1-15，2011，査読なし

〔学会発表〕（計１件）

① 本多壮太郎，外国人剣道指導者の指導観・使命感に関する研究－英国大学クラブ指導者を対象に－，日本武道学会第44回大会，2011年8月31日，国際武道大学

６．研究組織

(1) 研究代表者

本多　壮太郎（HONDA SOTARO）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10452707